

---

# 【いのせんと】

ーさん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【いのせんと】

【コード】

N3879G

【作者名】

ーさん

【あらすじ】

ナギの頼みでゲームを買いに来たハヤテは瀬川泉に出会う。

(前書き)

ハヤテ×泉です

「暑いな」

夏を思わせるような日の光に、眩しさで手で眼を隠す。ハヤテの呟きは周りの雑音に吞まれて消えた。

今は五月。すなわち春だ。だというのに先走った夏の到来は春の陽気を早足で抜き去り、道行く人に夏の気温をもたらず。それでも足を止めずに進む人々。

ハヤテもそれに習い、止めていた足を動かし始めた。吹き出る汗を拭い再び集団の中へと入る。

今日のハヤテの目的はもうすでに達成した。手に持つその物を見て、また一つ溜め息を吐く。

別にお使いを頼まれたから溜め息をついたのではない。ハヤテが心配しているのはただ一つ。

そう、それは学校。

このゲームにはまりまた学校を休むんじゃないかと懸念しているのだ。実際、何度もそれで学校を休んだりしている。

それでも断れないのが綾崎ハヤテで、ナギの執事である。ましてや、弱っている彼女からなら尚更だ。

五月病もここまでくれば立派な病気である。

「ん？」

見知らぬ人々の中に一人、覚えのある顔を見つけた。

いつもなら三人セットでいるはずの彼女だが、今日は珍しく一人だ。

そのことに疑問を抱きながらも、その人物の方へ寄って行った。

「どうしたんですか？こんな所で。」

「ハヤ太くんこそどうしたの？」

質問を質問で返されたハヤテは苦笑しつつ、理由を説明した。

「ふ〜ん」と頷く泉は、ハヤテは肩を叩き

「大変だね〜」と言った。言われたハヤテは苦笑するしかない。

「そういう、瀬川さんはどうしてここに？」

「私い！私はね、ケータイを買い変えに来たんだよ。古くなってきたからね。」

ホラっ、とハヤテに携帯を見せた。それは店で、今では多分1円で売られているであろう機種だった。

話によると、彼女の父親である泉父から

「瀬川家の人間がそんな古くさいのを使っではイカ〜ン！」と言われ、しょうがなく買いに来たらしい。

（瀬川さんも大変だなあ）

正直な感想だ。

「ソ〇ー限定だけだね」と一言つけられた言葉にハヤテは強くそう思った。

「ねえねえ、これから暇〜？暇なら付き合ってよ〜」

「えっ、あのっ…」

ハヤテが答えるまもなく、泉は問答無用に手を握ってハヤテを促す。

引っ張られたハヤテは拒むことが出来ずにただなすがままに連れられて行った。

そのカップルのような光景を偶然見かけた者がいた。

「アレは…」

見つけた後は、行動が早い。糸でも引かれたかのように自然と足がそちらに向けられていった。

春に似合う桃色の髪が風に揺られてたな引く姿に目を奪われる者が多くいたのはまた別の話だ。

「これなんてどうかな〜？」

「いいと思います」

ニコニコと笑顔で、手に持った携帯をハヤテに見せる。だが、返ってきた言葉に泉は頬を膨らませた。

「ハヤ太君そればかり。そんなんじゃ何がいいかわらないじゃない。」

「いや、どれを選ぶかは瀬川さんですし。」

ブーっと、不機嫌顔をハヤテに向ける。

イ

「ハハハ…」

苦笑い…そして困惑。

一体自分はどうしたらいいのだろうか？

この場合

「可愛いですよ」で誉めるべきか。

「瀬川さんにお似合いです」だろうか？いやしかし、携帯にお似合  
いとはいいいんだらうか？

その辺の知識はハヤテにはない。誰よりも心を鈍感にしてきたハ  
ヤテは、絹のように繊細な乙女心が理解出来なかった。  
腕を組み思考するハヤテに泉は三つの携帯を見せた。

「じゃあさ、こん中で、ハヤ太君はどれが私に似合うと思う。」

自分に向ける輝かしい眼に何かを期待していることを感じたハヤ  
テは、自分の思いのままに決めた。

「これです。」

指された携帯は黄色の、スライド式音楽携帯であった。

綺麗にカラーリングされたその色は向日葵の明るさを思わせる。  
少し小型なこともあって、何とも可愛いらしい。

「へへへ、ありがとうハヤ太君。」

幸せそうに握る泉にハヤテの頬は緩む。

(可愛いいな、瀬川さん)

無邪気に笑う泉の顔を見てハヤテは思った。

「だけど、その頃…」

二人を監視する影が三つあった。

「で、何であんた達がここにいるのよ？」

「偶然だ。気にするな。」

「そうだ偶然だ。それに、それは私達も思ったことだ。」

問いかける理沙の眼にヒナギクは何も言わずに顔を剃らした。

その様子に美希一人は口をニヤケさせる。

始めに二人を尾行していたヒナギクに気付いて、美希と理沙は彼女の後を追ってきて今にあたる。気になって見てみればなんと先にはハヤテと泉がいるではないか。

面白い

何処からか取り出したデジタルカメラで恥ずかしい場面を狙う。スナイパーのようなその様にヒナギクは冷汗が出る。自分の時は気をつけなければいけない。

「でも、どうしてハヤテ君と泉が…」

「付き合っているのか」喉から出かかったその言葉を、声に出す前に胸に残した。認めたくなかった。まだ私は何もしてない。

「おっ、動き出したぞ」

二人が移動し始めたことを確認すると、三人は後を追った。

ここからじゃ、何を話しているのか聞こえない。それは、ヒナギクにとって幸か不幸か果たして、どちらであつただらうか。

「じゃあさ、携帯を選んでくれたから何かお礼させてよ」

そう言われ連れて来られたのがゲームセンター。

「アレやろう、アレ」  
と催促されるままに二人でいろいろなゲームをした。レースや格闘、今流行りのオンラインクイズゲームなどだ。

ちなみにクイズは、するだけ無駄だったと言わざる得ない結果だったことをここに記しておく。

「アレやろう、アレ」

指指す先にある物は女の子に大人気、プリクラだ。というか、女の子しか使えない。ゲーセン内での女の髻、男が使うのは阻かられる。せめてもの救いは男女で撮ることだ。これが男同士なら、と考えるだけで恐ろしい。

執事虎鉄。頭に浮かんだその名前にハヤテは身震いした。

万が一あの変態と映った時には、もう自分は生きてはいけない。そう思うぐらいの嫌悪感をいつもハヤテは抱いている。巷では噂になっっているが、決してツンデレなんかではない。

「どれにする〜?」

「え〜と、ヤツパリ撮るんですか?」

「当たり前じゃない。入ったからには一緒に撮ろうよ〜」

ちよつと…いやかなりファンシーなデザインに抵抗を覚える。

外からの見た目もそうだったが、中はその比ではない。ハートやら動物やらキラキラやらでデザインされた様々なフレームが、ハヤテのやる気を損なわせる。

出来れば、撮らずに帰りたい。

その願いも手を握っている泉によって阻かれる。

「大丈夫大丈夫! ハヤ太君は女顔だから、別に違和感がないよ。それよりもどれにする〜? ハヤ太君はどれがいい?」

「…どれもいいです。もう。」

シヨックを受けながらも、何処か諦めたように呟くハヤテに、泉は様々なフレームの中から一つを指指ゆびさした。

それはハートで囲まれた可愛いフレームだった。

「…え〜と、これですか?」

「そっ。これ。」

余りの可愛らしさに、思わずハヤテは聞き返した。というか、これはちょっと恥ずかしい。

「これはちょっと…」

「え〜、いいじゃん いいじゃん 私がお金出すからさ〜、一緒に撮ろうよ〜」

とハヤテが何かを言う前に中央の決定ボタンを押す。

「え！あつ！瀬川さん」

「いいからいいから プリクラだからくっつかないと」

ニパっ笑う泉の笑顔がすぐ近くにある。

泉と身体を密着させたために膨らかな感触が腕を包んだ。

ビクっ、と身体が震えた。

「えっと、アノ…」

「ん〜、どうしたの〜？」

抱きつかれた腕に更に力が籠る。

強まった感触にハヤテの顔は赤くなった。

この態勢は、ちょっと…

「じゃあ、いくよ」

3

2

1

カシャ！！

二人が帰る頃には外はすっかりオレンジ色に染まっていた。

先ほど撮ったプリクラを見ながら、泉は機嫌良く足を進めていた。写真には満面な笑みの泉と少しぎこちないながらも笑いかけるハヤテの顔があった。

それを宝物のように大事に財布の中に入れて、スキップがちに歩き出す。

それを微笑ましげに見つめるハヤテ。

そんな光景がそこにはあった。

くるりと泉は振り返える。

「ありがとうハヤ太くん。今日は楽しかったよ」

「いえ、僕も楽しかったです。こちらこそありがとうございます。何だかんだで、ゲーム代を出して貰っちゃって。」

「お礼だよ」と屈託のない笑顔でそう返す泉の顔は、夕日のせ

いか少し朱に染まっていた。

「また一緒に遊ぼうね」

「はい。今度はお嬢様も一緒に。」

「違うよ」

「えっ！」

予想外の泉の言葉に、思わず聞き返した。一体何故だろうか、疑問が浮かぶ。

「二人で…だよ。」

驚くハヤテを気にせず、泉はハヤテの手をとって走り出した。

何処に向かおうとしているのかハヤテには判らなかった。だけど、走る泉の横顔を見てそんなことはどうでもいいことだと思った。

それが余りにも綺麗で、余りにも輝いていて。不思議な気分になったことは、多分ハヤテは忘れられないだろう。

それは悪い意味ではなく、もちろん良い意味でだ。

また一緒に来よう。

（今度もまた二人で）

強く、そう思った。

余談ではあるが、後日ヒナギクから遠回しにプリクラを撮るように  
ハヤテに言ったが余りにも、遠回し過ぎてハヤテは気付かなかった  
という。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3879g/>

---

【いのせんと】

2010年10月14日21時23分発行